

仏性を問う

―〈心を大切に守りながら生きてゆける社会〉とは―

三原正資

このたび全日本仏教会から配布されたリーフレット〈レインボーステッカーの掲示について〉には、次のように記されています。

今回作成したレインボーステッカーは、レインボーがそれぞれの色で輝いているように、それぞれの人がそれぞれの個性で輝き、幸せに生きることがを仏教が願っていることを発信する目的があります。仏教の『一切の生きとし生けるものは皆幸せであれ』という平等の教えを心に思うだけでなく、思いをかたちにする具体的な取り組みです。

それぞれの個性で輝くということについて、自身が性的マイノリティであることを公表した西村宏堂師（浄土宗僧侶）は語っています。

阿弥陀経のこんな一節を大事にしている。

「青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光」

極楽では、青色の蓮の花は青く光る。黄色の蓮は黄色く光る。「それぞれ異なる色で輝いているから素晴らしい」

という意味だ。(『毎日新聞』 二〇二〇年一月三日 〈個性を彩る メーク達人の僧侶〉)

とはいえ、多くの人々は、異なる色で輝くことを認めようとはしません。『ダラスの赤い髪』(キャスリーン・ケント ハヤカワ文庫 二〇一九)は、レズビアンの女性刑事・ベティとそのパートナーの物語ですが、彼女たちを見る人々の偏見はたいへん根強く、次のように描かれています。

その店員は、私たちが組み合わせている手を、あたかも交尾中のコブラでも見るかのようにじっと見つめた。

二〇一七年に第一五回蓮如賞を受賞した『宮沢賢治の真実』(今野勉 新潮文庫 二〇二〇)を読みました。同書の〈解説〉(首藤淳哉)には、次のように述べられています。

賢治が恋い焦がれた相手は、同性だった。著者はこの叶わなかった恋をつぶさに検証していく。思いを寄せる人からの手紙に胸ときめかせる賢治、会いたいとしつこく迫る賢治、同性を好きになってしまった自分は「けだもの」だと自嘲する賢治……。恋する賢治はとても生々しい。

私は賢治の作品に親しんで半世紀をこえますが、賢治が性的マイノリティであったかもしれないことを、自然のことと受けとめました。というのは、代表作『銀河鉄道の夜』のよく知られたシーンである主人公のジョバンニと親友カンパネラの印象的な別離は、同性の友人への愛を表現したものと解釈できるからです。

同性を恋う人間を妙法蓮華経はどう考えているのか、賢治は懸命に探したであろう。

と今野氏は考え、次のように記しています。

「譬喩品第三」に次のような釈迦の言葉がある。《今此の三界は 皆是我が有なり 其の中の衆生は 悉く是吾が子なり》(略) 仏の子に区別はないゆえ、同性を恋うる者もまた仏の子として認められるということだ。

『法華経』はこの「譬喩品」につづいて、「薬草喩品第五」では

我一切を觀ること 普くみな平等にして 彼此愛憎の心あることなし

と説き、授記すなわち成仏の保証を広く与えています。

ところが法華経は錯綜とした道筋を描くかのような印象を与えます。「安樂行品第十四」では、菩薩が親しんではならない多くの人々を列挙しています。

旃陀羅及び猪羊鷄狗を畜い 毘梨魚捕する諸の悪律儀に親近せざれ。(略) 女人の身に於て能く欲想を生ずる相を取つて、為に法を説くべからず、亦見んと樂はざれ。若し佗の家に入らんには、小女・処女・寡女等と共に語らざれ。亦復五種不男の人に近づいて以て親厚を為さざれ。(『真訓両読妙法蓮華経並開結』 平楽寺書店 一九六二)

と述べ、彼此愛憎の心のない平等の精神からは遠ざかっているように見えます。宮沢賢治は「安樂行品」のこの一節をどのように受けとめたことでしょうか。ちなみに、ひろさちや氏は「安樂行品」の「五種不男の人」を「男性能力が欠如しているとされる、男であって男ではない五種類の人」と訳しています（『法華経 日本語訳』 佼成出版社 二〇一五）。

さらに「隨喜功德品第十八」になりますと、法華経信受の功德を次のように具体的に説きます。では、いわゆる真読で読誦してみましよう。

阿逸多。若復有人語餘人言。有經名法華可共往聽。即受其教乃至須臾間聞。是人功德轉身。得與陀羅尼菩薩共生一處。利根智慧。百千萬世終不瘡癩。口氣不臭。舌常無病。口亦無病。齒不垢黑。不黃不踈。亦不缺落不差。不曲。脣不下垂。亦不褻縮不羸澁。不瘡疹亦不缺壞。亦不喞斜。不厚不大。亦不黧黑。無諸可惡。鼻不匾匾。亦不曲戾。面色不黑。亦不狹長。亦不窳曲。無有一切不可喜相脣舌牙齒悉皆嚴好。鼻修高直面貌圓滿。眉高而長額廣平正。人相具足世世所生。見佛聞法信受教誨。阿逸多。汝且觀是勸於一人令往聽法功德如此。何況一心聽說讀誦。而於大眾為人分別如說修行。

（前掲『法華経開結』）

伝統的な真読で読みますと、実にリズムカルなフレーズです。

ところで、イエス・キリストのルックスについて、遠藤周作氏は、国際的にも評価されている『イエスの生涯』（単行本は一九七三年、現在は新潮文庫）に次のように記しています。

イエスの生涯を語る聖書でさえ、全くと言っていいほど彼の外貌にふれてはいない。

『芸術新潮二月号』（二〇二一）には、聖母マリア像について宮下規久朗氏（神戸大学教授）は次のように解説しています。

聖母信仰は世界中にあります。その土地や時代の理想の美人像でもあります。（やっぱりみんなお母さんが好き！でもって、美人も好き！）日本の聖母は観音様ですね。

同じように、この「随喜功德品」の一節には『法華経』が生まれた土地や時代の人々が理想とした人間像が反映されているでしょう。

久保田正文師（一八九六―二〇〇一）は『法華経新講』（大法輪閣 一九六一）で、この部分を次のように解説しています。

「略）すべての人の嫌うような姿を得ることがないであろう」これは、心に正しい教えを持っていますと、それがおのずから身体に現れることで、法身が色身に現する、といわれていることであります。

ひろさちや氏は、この「随喜功德品」の一節を前掲書『法華経 日本語訳』に次のように現代語訳しています。

脣は垂れ下がったり、まくれ上がつってちぢこまることなく、（略）鼻にしても低くて団子鼻、曲がついているとうようなことはないし、顔の色も黒くなく、細くて長い、窪んで曲がついているようなこともなく、好ましくない所は皆無である。

「隨喜功德品」の一節は、今日では人を外見で差別することを批判したルッキズム（外見至上主義）と言われかねないものであることも承知しておきたいものです。

この中には特に次のような一節があります。

面色黒からず、（略）一切の喜ふべからざる相あることなけん。（前掲『法華経並開結』）

『法華経』の開経とされる『無量義経』『徳行品第一』には

大いなる哉大悟大聖主（略）其の身は有に非ず亦無に非ず、因に非ず縁に非ず（略）青に非ず黄に非ず赤白に非ず（略）戒・定・慧・解・知見より生じ、（略）衆生善業の因縁より出でたり。（前掲『法華経並開結』）

というよく知られた一節があります。

なぜ、「隨喜功德品」では、『無量義経』とは異なり、空・平等の精神から離れたかのような表現となったのでしょうか。インド・アリアンが支配したカースト社会においては、このような表現が説得力をもっていたとしか考えられません。橋爪大三郎氏の「宗教は社会構造である」（『世界がわかる宗教社会学入門』ちくま文庫 二〇〇六）と
いうことばを、思い出します。

この「面色不黒」の一節は、「ブラック・ライブズ・マター（黒人の命も大切だ）」の声が全世界で共感される現代社会では、どのように受けとめられることでしょうか。

「面色不黒（略）無有一切不可喜相」と説く部分に対応する『法華経』のいくつかのサンスクリット語原典からの日本語訳、英訳（The Lotus Sutra）そして、現代日本語訳の該当箇所は次のようになります。

顔が黒くなったり、人に不快を与える顔になったりすることはない。

（『法華経』下 坂本幸男、岩本裕訳注 岩波文庫 一九六七）

その人は、長い間、歪んだ顔、黒い顔、酷い顔を持つこともないのだ。

（『法華経』下 サンスクリット原典現代語訳 植木雅俊訳 岩波書店 二〇一五）

His face will not be black, long, distorted or displeasing.

(Senchu Murano 1974)

His face will not be swarthy, nor will it be long and narrow, or sunken and distorted.

(Burton Watson 1993)

They will never be dark complexioned... They will have no mark which is displeasing to others.

(Kubo Tsugunari and Yuyama Akira, Numata Center 1993)

Their faces will not be dark... There will be nothing displeasing about them.

(Gene Reeves 2008)

顔の色は黒くなりません：

『現代日本語訳 法華経』 正木晃 春秋社 二〇一五)

顔の色は黒くなく：あらゆる好ましい相をそなえているだろう。

『新解釈現代語訳 法華経』 石原慎太郎 幻冬舎 二〇二〇)

このように多数の各種現代語訳本によって、当然のことですが、法華経の内容が多くの人々に明確に伝わる時代であることに、私たちは注意する必要があります。

五木寛之氏は、『毎日新聞』(二〇二一年一月二一日)の池上彰氏との対談(これ聞いていいですか?)の中で、「アンコンシャスバイアス(無意識の偏見)」に触れて、次のように語っています。

アフリカ系米国人のボクシング選手だったカシアス・クレイさん(一九四二〜二〇一六)と対談したとき、彼は「言葉の問題」と語りました。例えば、ブラックマーケットは怪しげな闇市を意味するし、ブラックリストは指名手配、ブラックメールは脅迫状といった意味になる。生活の中に「黒は悪」との観念があつて、その言葉をみんなが使っている限り、自分たちは絶望的だと

『法華経』は以後の各品で、改めて平等の精神を強く主張します。

「常不輕菩薩品第二十」では、常不輕菩薩が「我深く汝等を敬ふ、敢て輕慢せず」等と人々に語りかけます。「不輕慢」とは、これまで一般大衆を輕慢（「輕んじたり見下げるようなこと」前掲ひろさちや訳）した事実があったということでしょう。「安樂行品第十四」や「隨喜功德品第十八」の教説を念頭においた表現かもしれません。また、「妙音菩薩品第二十四」では明らかに教説が變化し、淨光莊嚴世界の淨華宿王智仏は、「端正」「殊妙」な妙音菩薩に次のように忠告します。「汝、彼の国（娑婆世界）を輕しめて、下劣の想を生ずることなかれ」と。なぜならば、彼らの身体は「卑小」であるからだといのです。人々を「下劣」「卑小」と見たことは「安樂行品」等と同じですが……。また、妙音菩薩は、現一切色身三昧に住して「王の後宮に於ては、變じて女身となつて是の經を説く」といいます。性自認は男性の女性、トランスジェンダーの菩薩がモデルかもしれません。

私は、壮大な法華經虚空会の展開の過程の一隅で、このように平等と差別、理想と現実の対立と克服が語られることは、娑婆世界に淨土を実現しようと考える法華經の魅力であると思います。

池上氏との対談の中で、五木氏は次のように慨嘆しています。

世の中というのは正しいことだけではなく、いつも常に矛盾をはらんでいると思っています。やはり生きているということは、そんなにきれいなことばかりじゃないですからね。（『毎日新聞』二〇二二年一月二日）

鎌倉時代の人々にとっては、『法華經』は「金口の直説」でした。疑問を抱き批判することは稀でした。宗祖は「安樂行品」や「隨喜功德品」の教説と自身の出自や環境の現実とを比べて、どう考えられたことでしょう。『開目抄』では「隨喜功德品」を引用することこそませんが、『般泥洹經』を引用して、次のように述べています。

一一の句を我が身にあわせん。(略) 或は形状醜陋。又云く衣服不足。予が身也。(略) 生貧賤家。予が身也。或遭王難等。(略) (定遺六〇二頁)

「予が身也」という言葉に、宗祖の苦悩を読み取るべきでしょう。「いづこから来たかもわからない無智な修行者」と人々によって蔑まれた常不軽菩薩に自己を重ね共感していくのは、そのためでしょうか。常不軽菩薩自身が「軽慢」された人々の一人であったのかもしれませんが。

宗祖は、この常不軽菩薩について『観心本尊抄』の中で

不軽菩薩は所見の人に於て仏身を見る。(定遺七〇六頁)

と語ります。常不軽菩薩は、彼を罵った「歪んだ顔、黒い顔、酷い顔」(植木雅俊訳 前掲書)にも仏身を見たのです。

法華経の修行の肝心は不軽品にて候なり。不軽菩薩の人を敬ひしはいかなる事ぞ。教主積尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ。(『崇峻天皇御書』 定遺一三九七頁)

と示されています。私たちが、たとえ「歪んだ顔、黒い顔、酷い顔」に生まれようとも、もちろん、それはアンコンシャスバイアスによる見方なのですが、私たちは行いによって仏になるのです。アンコンシャスバイアスを離れることは「信仰の寸心を改める」(『立正安国論』 定遺二二六頁) ことであり、心(受、想、行、識)を見つめる仏教

のアルファでありオメガであるといえましょう（『現代宗教研究』第五号所収 拙稿「私たちはアーティスト」二〇二一）。

宗祖は、ご自身について率直に次のように語ります。

日蓮は（略）安房の国海辺の旃陀羅が子也。（『佐渡御勘気鈔』 定遺五一頁）

辺土に生をうく。其上へ下賤、其上へ貧道の身なり。（『開目抄』 定遺五五六頁）

日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ、旃陀羅（漁者）が家より出たり。（『佐渡御書』 定遺六一四頁）

正像二千年の大王よりも、後世ををまん人々は、末法の今の民にてこそあるべけれ。かの天台座主よりも南無妙法蓮華經と唱る癡人とはなるべし。（『撰時抄』 定遺一〇〇九頁）

この六月に歌舞伎座で『日蓮』を観たとき、狂女おどろのシーンでは、この『撰時抄』の一節が心に浮かんだものです。なお、宗祖は承久の戦を起こした北条義時を「伊豆の国の民」（定遺一八八七頁）と呼んでいます。

このような日蓮聖人の切実なことばによって、貴族や上級武士によって尊崇された法華經は庶民の信仰の対象となつたのです。すなわち、私たちは平等に仏性をもつという法華經が「一切の生きとし生けるもの」のもとに、そして「卑小」なものの一々である私のもとに、初めて届き、名実ともに意義のあるものとなつたのです。それはテキストとしての『法華經』ですが、同時に、日蓮聖人によって語られた〈法華經〉でもあります。（『現代宗教研究』第五一

号所収 拙稿「法華経は現代の私たちの物語」二〇一七。

当世の法華経の行者として仏語を実語とせん。（『開目抄』 定遺五九九頁）

ということばは、聖人がテキストが帯びている歴史的制約を超えたことを示しています。

佐藤弘夫氏は『日蓮』（ミネルヴァ書房 二〇〇三）の中で次のように述べています。

日蓮にとって重要なことはただ一点、正しい信仰をたもつか否かだった。法華経の前では、性差や身分の区別などはなんら本質的な問題ではなかったのである。

これらのことから、性的マイノリティの人々をはじめ「それぞれの人がそれぞれの個性で輝き、幸せに生きる」力を『法華経』と日蓮聖人から得ることができる、私は思います。

さて、宮沢賢治は晩年に、後に「雨ニモマケズ」と呼ばれる詩を残しました。

ミンナニデクノボートヨバレ／ホメラレモセズ／クニモサレズ／サウイフモノニ／ワタシハナリタイ

という一節には、常不軽菩薩への思いと、賢治の心の屈折が滲んでいます。

ところで、現代の脳科学は私たちの性差はモザイク模様で、人類は中性化に向かっていると明かしています（NHKスペシャル「ジェンダーサイエンス」二〇二一年一月三日）。すなわちLGBTQは「自然（ネイチャー）」あ

るいは「生命」そのものであり、私たちは率直にその事実を認めるべきです。ことさらに「寛容の精神」の対象とされるものではないのです。

最後に、人種差別に反対した日系アメリカ人の作家ジョン・オカタ氏（一九二三～）の小説『ノー・ノー・ボーイ』の一節を紹介しておきます。「ノー・ノー・ボーイ」とは、戦時中アメリカ合衆国内にて、収容所に収容されていた日系人のうち、合衆国への忠誠を問う二つの質問に対して「ノー」といった人のことを指します。

（天国への）旅立ちに乾杯してくれ。そこにはジャップとかチンクとかユダ公とかポー公とか黒んぼとかフラン
ス野郎とかの区別がなきゃいいな。みんなただの人間、っていうのがいいな。（『毎日新聞』〈特集ワイド〉二〇二
一年五月九日）

私たちは「分別」し、差別することから離れられないのです。しかしオカタ氏は、多様性がそのまま肯定されることを願っているようです。同じように私たちは、人種やLGBTQなど、いかなる個性の違いをもつていても、それが差別につながることはない「みんなただの人間」という世界、「心を大切に守りながら生きてゆける社会」（二〇二一年一〇月一六日 小室眞子さん 結婚記者会見の発言）の実現に努力したいと思います。

なお、タイトルの〈仏性を問う〉は、蓑輪顕量先生が著書『日本仏教史』（春秋社 二〇一五）の中で、「いのちに合掌」をスローガンに掲げた日蓮宗の宗門運動を「仏性思想を問い直す運動」とされていたことを参考にしました。パネルディスカッションに先立ち、私の考えていることを述べさせていただきました。本日のパネルディスカッションを楽しみにしております。